

平成20年度  
国立情報学研究所市民講座 第3回

データ社会とアーカイブ  
— 年金記録問題などに見られる  
情報管理の重要性とは？ —

2008年8月25日

国立情報学研究所

情報社会相関研究系 助教

古賀 崇

# 本日の内容

- 「アーカイブとは何か」の確認
- 組織にとってのアーカイブ
- 電子記録とアーカイブ
- 日本のアーカイブ(公文書管理)政策
- さらなる課題
- 参考文献・ウェブサイト: 近刊の紹介含む

アーカイブ(ズ)とは何か

# 「アーカイブ(ズ)」とは？

- アーカイブズ：もっぱら「文書館」、あるいはそこに蓄積・所蔵される「文書」「記録資料(文字資料)」という意味で用いられる
  - 古賀なりの定義(アーカイブズ学の通説にならい)：「個人または組織がその活動のなかで作成または收受し、蓄積した資料で、継続的に利用する価値があるので保存されたもの」
  - この意味で「アーカイブ」が用いられる場合も
- アーカイブ(コンピュータ用語として)：複数のファイルを1つにまとめたり圧縮したりしたファイル。あるいは、インターネット上で公開されたファイルの保管庫

# 「アーカイブ(ズ)」とは？(続き)

- アーカイブス: NHK独自の？用語。NHKが過去放送した番組を蓄積し上映する施設(埼玉県川口市)、および過去の番組を放映するプログラム(土曜午前)
- ほかに「アーカイヴ」「アーカイヴズ」などの表記も  
↓
- 本発表では、さしあたり(幅広い意味を包含するものとして)「アーカイブ」を用いる

# さまざまな「アーカイブ」

★アーカイブ(ズ)の用例・領域が近年、広まりつつある

- 文化関係の資料・作品を収蔵する機関・機能
  - 例:「日本脚本アーカイブズ設立準備室」「歴史的音盤アーカイブ推進協議会」
- 特定の企業・組織がもつ情報資産
  - 例:スポーツ関連団体がもつ映像アーカイブ、出版社や編集プロダクションがもつ写真アーカイブ
- 新たな作品を生み出すための、過去の作品の蓄積
  - (蓄積のための「場」やしぐみがあるとは限らない)
  - CD、DVDなどでの単なる作品集を「アーカイブ」と呼ぶことも

# さまざまな「アーカイブ」(続き)

- データ・アーカイブ:「統計調査、社会調査の個票データ(個々の調査票の記入内容。マイクロデータ)を収集・保管し、その散逸を防ぐとともに、学術目的での二次的な利用のために提供する機関」
  - 東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター・SSJデータアーカイブ ウェブサイトでの説明より

# で、「アーカイブ」は結局何であるのか？

- 狭義：個人としての活動、あるいは組織としての活動の記録（文書類）のうち、継続的に利用する価値があるので保存されたもの。また、そのための施設ないしくみ
- 広義：「過去の情報・資料・データの蓄積」また「それを保存するしくみ」
- いずれにせよ、「過去の蓄積を知識・資産として生かす」というのがポイント



# 「アーカイブ」として何が保存されるのか？

- (狭義) : 記録(records) = 業務の過程(プロセス)に結びついた情報

→このうち、「非現用記録」=業務の「現場」では必要とされなくなった記録、が保存される  
(⇔「現用記録」:現場で用いられている記録)

- (広義) : 何でも？

## 参考:「デジタル・アーカイブ」について

- 1994年頃が始まり: インターネットの民間での利用が始まり、「マルチメディア」も喧伝されていた
- 静止的な文化財、芸術作品についてデジタル画像を蓄積し、世界中の人々へ広く公開する、というのがうたい文句(のちに動画も含める)
- 「デジタルアーカイブ推進協議会」1996年設立～2005年解散
- 地域での活動: 京都、石川など
  - 「地域ブランドの形成・活用」という側面が強い

# 「デジタル・アーカイブ」について(続き)

- ブーム(作ればいい)は去り、より「戦略」「戦術」(どう活用させるか)が求められる段階へ
- もっとも、明確な(共有できる)「デジタル・アーカイブ」の定義は成されていないまま
  - 「デジタル・アーカイブ」は日本での造語であり、もともと海外には存在していなかった用語・概念

アーカイブのしくみ：  
組織活動とのかかわりを中心に

# アーカイブのしくみに求められるもの

(1)情報(記録)の評価・選別

＝何を残し、何を捨てるかの判断

(2)評価・選別された情報(記録)の整理・保存

+

(3)情報(記録)を、その作成時点から管理すること

※(3)はもともと、現用記録の取り扱いに関する「記録管理(学)」の領域だが、アーカイブもこの領域に関与し始めている

→アーカイブ(情報管理)と組織マネジメントとの結びつき

# 2つの種類のアーカイブ：組織の活動との関連で

- アメリカ・アーキビスト協会の用語集より (<http://www.archivists.org/glossary/>)
- **機関アーカイブ** (institutional archives) : 親機関によって作成ないし受理された記録を保管する場 → 政府、企業等のアーカイブが該当
- **収集アーカイブ** (collecting archives) : 親機関ではなく個人、家族、組織から資料を収集して保管する場 → 個人の文書などを扱う「史料館」的なものが該当

# 「機関アーカイブ」のポイントは...

- 組織の内部において、各部局からアーカイブ機関(文書館)への記録の移管が体系的に進められているかどうか
  - 「組織の活動(その結果だけではなく過程も)の証拠」としての記録を残すことが意識されているか。また、アーカイブがそのような場として意識されているか
- 米国・カナダ・オーストラリアなどでは、「機関アーカイブ」「収集アーカイブ」の区別が明確に意識されている

# 日本では...

- 「機関」「収集」のアーカイブの区別が曖昧なまま
  - 組織内での記録が体系的に移管されることは稀
  - 公文書館の職員でさえ、職場の「大掃除」期間中に「ゴミ拾い」として記録(文書)を収集することを余儀なくされる
- 「たまたま」残った文書は、組織の活動(過程)の証拠と言えるか？
- 根本には、組織として「何を残すか」「なぜ残すか」に関する考え(哲学)の不在があるのでは...



# 何を、なぜ残すのか

- 日本では「歴史的に重要なもの」に引きずられがち
  - 公文書館法(1987年制定)第3条:「国及び地方公共団体は、**歴史資料として重要な公文書等**の保存及び利用に関し、適切な措置を講ずる責務を有する。」
  - 「歴史」と「現在」とが切り離されていないか??
- それ以外には...
  - 組織として、過去の活動過程を検証し、今後の活動に生かす(「失敗学」にも通じる)
  - 個人の権利保障(土地の権利など):組織として外部のやりとりを残しておく必要
  - 組織や個人のアイデンティティのよりどころ

# 年金記録問題の教訓

- 詳しくは別紙「年金記録問題に寄せて」参照  
(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/rmsj/nenkin.html>)
- 個人の権利にかかわる記録が、あまりにもぞんざいに扱われていた
  - 氏名(漢字・カナ)、住所等のデータ入力・整備を軽視
  - 過去のデータの誤りについて検証し改善する活動が成されず
- 記録システムの整備や移行の問題
- ずさんな記録管理を許す組織ガバナンスの問題

# 年金だけではない、 個人の権利をめぐる問題

- 薬害関連記録(カルテ管理も含め)
- 海外残留孤児の記録(『入門・アーカイブズの世界』冒頭の、安藤正人教授の解説参照)
- 海外の場合は...
  - 独裁体制下の抑圧の記録が、「解放」後の名誉回復・補償の根拠に
  - 東欧諸国での共産党アーカイブにおける逮捕記録が、親族の足跡をたどる手がかりに

# 「証拠としての記録」の意識

- 組織や個人の活動(過程)の証拠を長期間にわたって確保するために、「現用記録」の管理と「アーカイブ(非現用記録)」管理を一体のものとして捉えるのが世界的傾向となりつつある
  - － 「機関アーカイブ」のあり方として
  - － 記録作成時点からの介入
  - － 記録作成・管理に関する監査
- 背景要因
  - － 記録の電子化
  - － 内部統制・業務統制、訴訟への対応...

# 「証拠」だけではない側面も...

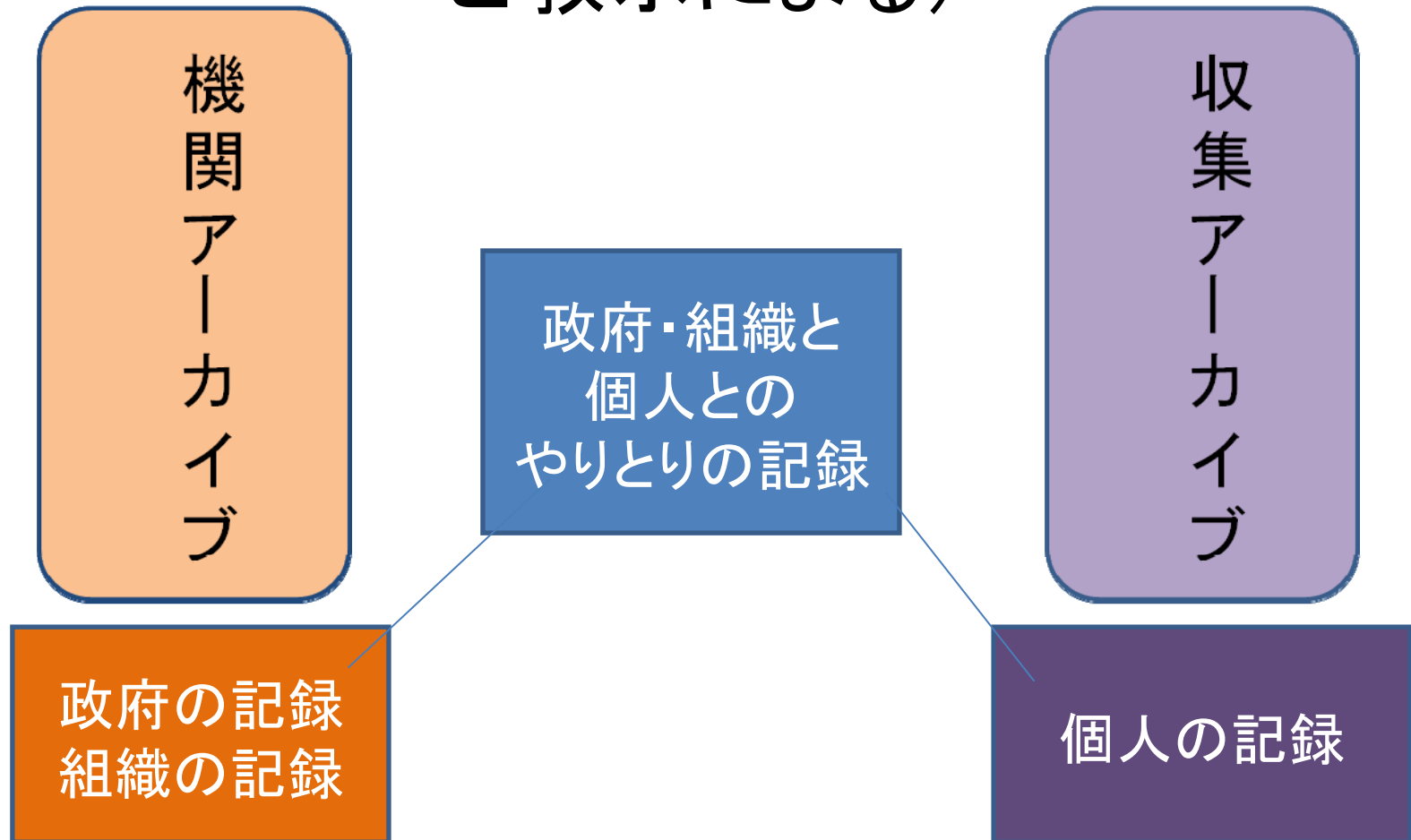
- 「監査文化」の弊害：記録は監視につながる
- 「記録」を作成する側にとっても「いやいやながら記録をつくる」「証拠になりそうなものは残したくない」という傾向を招きやしないか
- 記録に「人間の幅広い経験」（米国のGerald Hamのことば）が反映されるか？
  
- 「証拠」重視のもとでは、「収集アーカイブ」の役割—人々の「記憶」を伝える—は小さくなる

# 解決策は？

- 「トータル・アーカイブ」という考え（カナダで考案）
  - － 「機関アーカイブ」「収集アーカイブ」の双方を包含し、「証拠」と「記憶」の両立を目指す
  - － 組織と個人とのやりとりを記した記録に注目
    - － ある出来事が、組織の側、個人の側でどう捉えられたか
    - － 運動（ロビーイング）の記録、訴訟の記録など
- 「組織として記録を残さねばならない」と「組織で（個人として）生きた証を残したい」のせめぎ合い

# トータル・アーカイブの考え

(カナダ・マニトバ大学Terry Cook教授のご教示による)



# 電子記録とアーカイブ



# 情報技術の進展とアーカイブ

- 4つの種類の「電子記録」に留意する必要  
(Terry Cook教授のご教示による)
  - (1)「レガシー(メインフレーム)」コンピュータ上の記録
  - (2)パソコン上の記録
  - (3)Web(2.0)上の「動的」な記録
  - (4)特別な扱いを必要とする記録: CAD記録、GIS記録など
- 記録・情報の管理というよりは、組織マネジメントの問題として考える必要
  - 何を長期的に保存する必要があるか？そのための方法は？

# 名和小太郎教授の 「対抗イノベーション論」に学ぶ

- 名和のスタンス：法・制度に対する技術者からの視点
- 主張：「部分最適化に視野を閉ざされた技術革新（イノベーション）」ゆえ、法制度はつぎはぎ状態になってしまう
  - 著作権、情報セキュリティ、プライバシー保護...
- 『イノベーション：悪意なき嘘』（岩波書店, 2007）



# 名和の「対抗イノベーション論」(続き)

- イノベーション=新しいプロダクトやプロセスを導入して利益を確保すること
    - 「ブレークスルー」「部分最適」「短寿命」「リスク選好」といった要素が好まれる
    - 技術的側面のみならず、経営組織や産業制度の側面にも及ぶ
  - しかし、これらは長期的視点として必要な要素とは相反する
    - 「品質管理」「保守」「資源節約」「廃棄物処理」
- こうした考えと、アーカイブを結びつけられないか？

# 日本のアーカイブ(公文書管理) 政策

# 2003年からの活発な展開

- 福田康夫現首相（2003年当時は官房長官）のリーダーシップに依るところが大きい
  - － 歴史資料として重要な公文書等の適切な保存・利用等のための研究会（2003年5月～11月）
  - － 公文書等の適切な管理、保存及び利用に関する懇談会（2003年12月～2006年6月）

[http://www8.cao.go.jp/chosei/koubun/index\\_k.html](http://www8.cao.go.jp/chosei/koubun/index_k.html)

- 法制度の検討
  - － 公文書管理法研究会（総合研究開発機構より商事法務研究会に委託、2005年7月～2006年7月）
  - 総合研究開発機構・高橋滋（共編）『公文書管理の法整備に向けて：政策提言』商事法務, 2007.

# 福田内閣での動向

- 施政方針演説(2008年1月)で行政文書管理体制の整備に言及
- 公文書管理担当大臣職の新設(2008.2～)
  - 上川陽子大臣(～2008.7)→中山恭子大臣(2008.8～)
- 「公文書管理の在り方等に関する有識者会議」(2008.2～):内閣の下に設置
  - 2008.7に中間報告公開『「時を貫く記録としての公文書管理の在り方」～今、国家事業として取り組む～』
  - 2008.10までに最終報告提示予定

<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/koubun/index.html>

→ 2009年初頭の通常国会に「公文書管理法案」提出？

# 政策上の検討課題

- 「組織文化」「文書文化」を変えられるか？
- 専門職としての「アーキビスト」「レコード・マネジャー」の養成と位置づけ
  - 組織の活動全体を見渡し、動かすだけの知識と力量が必要
- 国家的情報戦略・情報政策の中でのアーカイブ・公文書管理＋情報管理の位置づけ
  - 国立国会図書館、NIIなどとの関係も視野に
  - 「外交交渉におけるヘゲモニーとしての公文書」  
(川島真・東大准教授)

# さらなる課題



# 本講演で扱いきれなかった点

- 評価・選別の考え方
  - 「組織の活動過程」を残すための方法論
  - デジタル情報のためのストレージ性能を上げればいい、では済まない
- 「記録連続体 (records continuum)」理論の検討
- 文化遺産、産業遺産としてのアーカイブ
  - 地域アイデンティティ・観光と日常生活とのせめぎあい
- 映像・テレビ (の公共性) とアーカイブ
  - 水島久光『テレビジョン・クライシス』(せりか書房, 2008)
  - フランスの状況(デリダの論考も)

等々...

# 参考文献(1)

- 『アーカイブへのアクセス:日本の経験、アメリカの経験』小川千代子・小出いずみ編, 日外アソシエーツ, 2008年9月下旬刊行予定, 3,990円(税込)  
ISBN: 978-4-8169-2136-0



## 参考文献(2)

- 松岡資明・日本経済新聞編集委員の記事(以下は一例)
  - 「現代を歴史に刻む:アーカイブズ新しい芽(ドキュメント 挑戦)」  
日本経済新聞(夕刊)2007年11月26日～12月21日(月～金掲載), 全20回.
  - 「〈文化財〉取材日記:日本のアーカイブズとその未来」  
『本郷』(奇数月刊、吉川弘文館)2008年3月号～連載中.

## 参考文献(3)

- 岩田書院の書籍 (<http://www.iwata-shoin.co.jp/>)
  - 『アーカイブを学ぶ』小川千代子ほか編, 2007.
  - ブックレット文書館シリーズ 既刊10点
    - 最新刊は『世界のアーキビスト』全国歴史資料利用保存機関連絡協議会(全史料協)編, 2008.
- 『入門・アーカイブズの世界』(翻訳論文集)  
記録管理学会・日本アーカイブズ学会共編, 日外アソシエーツ, 2006.

## 参考ウェブサイト

- 「Daily Searchivist」(坂口貴弘氏作成、ブログ＋メルマガ)

<http://d.hatena.ne.jp/searchivist/>

- 「記録管理、アーカイブズ、レコードキーピングをめぐる情報源案内(パスファインダー): 英語圏の論文等を中心に」(古賀作成)

[http://research.nii.ac.jp/~tkoga/recordkeeping\\_guide.html](http://research.nii.ac.jp/~tkoga/recordkeeping_guide.html)

- 特にオススメなのは、Richard J. Cox教授(米国ピッツバーグ大学)の書評ブログ

<http://readingarchives.blogspot.com/>